

報徳博物館

友の会

だより

No.65・66



二宮尊徳思想国際シンポジウム

去る6月22・23日、北京大学日本文化研究所・報徳博物館共催の「二宮尊徳思想国際シンポジウム」が北京大学で開かれました。中国側41名、日本側45名の出席者のうち、中国側11名・日本側8名が、報徳思想と中国文化との関係、日本や東洋における尊徳の思想の位置、報徳思想と日本の近代化との関係、21世紀における報徳倫理の果たすべき役割、尊徳研究の学術的意義、などについて発表し、それを受けて、会場全体による活発な討論が繰り広げられました。

尊徳の思想を正面から取り上げる、こうした学術討論会が催されたこと自体、特筆すべきですが、中国の首都にある国立大学が、その会場になったということも画期的といえましょう。開催までの経緯も含めて、シンポジウムの概要を報告します。

◆開催までの経緯

今回のシンポジウムは、北京大学日本語文化系教授・同大学日本文化研究所所長・史学博士、劉金才氏リウキンサイの存在なくしては、到底実現しなかったでしょう。

今から10年前、劉氏は、戦後50年間に生じた日本と中国との経済格差の原因解明のため、日本に滞在中、小田原の報徳二宮神社を訪れ、報徳に心を打たれたといえます。帰国後、報徳の研究を始め、4年後の平成8年（1996）5月19日、報徳二宮神社の春の例大祭に合わせて、報徳博物館が主催した記念講演会（於報徳二宮神社報徳会館）で「二宮尊徳の『報徳思想』と日本の近代化について」と題する講演を行っています。その翌日、報徳を主題とした2幅の書を携えて（左写真）報徳博物館を視察し、佐々井館長（当時）ほか職員らと懇談しました。それ以後、2回来日しています。



平成13年1月、劉氏から草山館長あてにEメールが届きました。それには、北京大学に新たに日本文化研究所が設立され、劉氏がその所長に就任したこと、来年の5月か6月ごろ、報徳に関するシンポジウムを開催したいことが記されてありました。シンポジウムの正式な提案書が劉氏から送られてきたのは同年7月のことでした。そして、本年の2月になって、北京大学で6月22・23日にシンポジウムを開くことが確定したのです。

報徳に関する国際シンポジウムの開催！劉氏から提案を受けた当初、報徳博物館の中にさえ、シンポジウムなど夢物語というような声がありました。それほど、前代未聞の話だったのです。ところが、シンポジウムの日程が決まってからは、まさに急転直下。本年4月、来日した劉氏と、草山館長らが、シンポジウムへの協力依頼のため大日本報徳社・掛川市役所・小田原市役所を訪問します。さらに、草山館長らが今市の報徳二宮神社・今市市役所・栃木県庁などを訪れて、同じく協力を依頼したり、小田原市役所の記者クラブで記者会見をするなど、各方面への周知につとめました。

ところが、シンポジウムの日程が決まってからは、まさに急転直下。本年4月、来日した劉氏と、草山館長らが、シンポジウムへの協力依頼のため大日本報徳社・掛川市役所・小田原市役所を訪問します。さらに、草山館長らが今市の報徳二宮神社・今市市役所・栃木県庁などを訪れて、同じく協力を依頼したり、小田原市役所の記者クラブで記者会見をするなど、各方面への周知につとめました。

ところが、シンポジウムの日程が決まってからは、まさに急転直下。本年4月、来日した劉氏と、草山館長らが、シンポジウムへの協力依頼のため大日本報徳社・掛川市役所・小田原市役所を訪問します。さらに、草山館長らが今市の報徳二宮神社・今市市役所・栃木県庁などを訪れて、同じく協力を依頼したり、小田原市役所の記者クラブで記者会見をするなど、各方面への周知につとめました。

その間、中国側と何度も事務連絡を取り合いながら、出席者・発表者の陣容を整え、シンポジウム前日の6月21日、日本側出席者は、各自の居住地の関係もあって、成田空港あるいは関西空港から、それぞれ北京へ向かったのです。

◆6月22日・シンポジウム1日目

人民大会堂・中南海といった政治の中枢や、故宮博物院・天壇公園などの観光施設が混在する北京の中心部。その中心部から、やや離れた、多くの学校が集中する地区の一面に北京大学の緑豊かで広大なキャンパスがあります。シンポジウムの会場となった同大学外文楼は、外観の重厚さと、内部の落ち着いた雰囲気とが調和した、学術研究にふさわしい建物です。

その外文楼の1階ロビーで受け付けが行われ、シンポジウムの日程表や発表の要旨とともに、日本側出席者へは北京大学の風景を染め付けた景德鎮製の絵皿が、中国側出席者へは分度湯呑・報徳便箋・学園花の村製の「自然茶」が、記念品として手渡されました。

開幕式は予定より20分遅れた午前9時10分に始まりました。これは、日本側の出席者を乗せた貸し切りバスが、ホテル（北京友誼賓館）から大学へ向かう途中、交通渋滞に巻き込まれてしまったためです。

開幕式では中華日本学会会長・北京大学客員教授の劉徳有氏、大日本報徳社社長・早稲田大学客員教授の



榛村純一氏、北京大学社会科学部部長・中文学部教授の程郁綴氏、報徳博物館の草山昭昭館長、北京大学日本文化研究所所長の劉金才氏、の5名の挨拶がありました（上写真）。その後、出席者全員が外文楼の入口に移動し、小雨の降る中、記念撮影が行われました（表紙写真）。

シンポジウムは、4～6名の発表者と、司会をつとめる2名の座長とが、ひとつのグループを作り、それらのグループが順次、登壇して進められました。以下に、個々の発表の内容を、ごく簡単に紹介します。なお、発表者の敬称は省略させていただきます。

すめらぎ

皇 紀夫 京都大学大学院教育学研究科教授

「二宮尊徳研究の学術的意義」

尊徳についての研究を進めるために、資料を言語学的に読み取るべきことを提唱します。すなわち、『三才報徳金毛録』の中の円相の図を「図像言語」として読み解いたり、『二宮翁夜話』などに見られるところの、尊徳が人々を感化するために、たとえ話を活用し得た点に注目する必要があるとのこと。

張憲生 広東外貿外国語大学日本語学部副教授

「二宮尊徳における普遍主義的の思惟様式」

幕末の新発田藩の大庄屋や、津和野藩の神官らが、当時の農村問題の解決方法を神道のみに求めたのに対し、神道・儒教・仏教を柔軟に取り入れた尊徳の普遍主義的の思惟様式は、現代社会の諸問題の解決にも有効であると、高く評価しました。

斎藤清一郎 報徳博物館館長代理

「二宮尊徳の思想の源流—儒教との関わり」

尊徳の経歴から離れて、その思想を語ることはできないとし、『二宮先生語録』の一節を主な資料としながら、少年時代・青年時代・桜町時代・幕臣時代、のそれぞれの時期、尊徳が儒教とどのように関わっていったのかを解説しました。

劉金才 北京大学日本文化研究所所長

「近世倫理思想史における尊徳思想の位置付けについて」

江戸時代の町人倫理が資本主義化するには、その倫理が、物質的な富を産み出す農民に浸透しなければならないが、尊徳の理念は、両者を有機的に結びつけたと高く評価しています。



ここで昼休みとなり、午後の部は2時に始まりました。発表に先立ち、北京大学日本文化研究所へ、草山館長から岡崎雪声作「金次郎」像が、榛村純一大日本報徳社社長から「報徳訓」の掛軸などが贈呈されました。

榛村純一 大日本報徳社社長・早稲田大学客員教授

授

「報徳思想の現代的解釈とその意義」

まず、静岡県掛川市での報徳運動の実例を紹介

します。尊徳の思想については、人民の勤労を重視した点を高く評価し、また、勤労・分度・推譲の3原則を仏教思想や西洋思想と比較しました。

郭連友 北京日本学研究所センター副教授

「戦時中の中国における二宮尊徳研究」

当時の中国の親日政権（南京政府）の翻訳局の責任者で、日本に長く留学した経験をもつ趙如珩の著『吉田松陰略伝』の付録に尊徳が取り上げられていることを紹介し、でっち上げの尊徳像を当時の国策に利用していたと指摘しています。

前田寿紀 淑徳大学社会学部助教授

「近代日本における報徳社による二宮尊徳の『富国安民』思想・仕法継承の意義」

尊徳の「富国安民」思想の内容や、それを基にした仕法の実施過程を解説し、その仕法を明治以降の報徳社が、国家にかかわって、率先継承していた点を高く評価しました。

左漢卿 北京郵電大学外国語学部専任講師

「尊徳と昌益の理想社会像

—『極楽の地』と『自然の世』

尊徳・安藤昌益が、それぞれに追求した理想社会像を比較し、昌益のそれは消極的な世捨てる思想だが、尊徳のそれは現実立脚した積極的なものであったと評価します。そして、尊徳の思想と実践は現代社会でも有用であると強調しました。



ここで10分間ほどの休憩をはさんで、引き続き発表が行われました。

並松信久 京都産業大学経済学部教授

「資本主義経済の展開と報徳社の特徴

—来日西洋人の評価を通して—

資本主義化という目的にとらわれない、明治期の来日西洋人の目を通した報徳社の評価を紹介して、日本の経済学は、欧米の経済学の諸概念を軽率に借用するのではなく、その方法論を考え直すべきだと提言しています。

徐滔 北京外国語大学日本語学部専任講師

「つくられた二宮尊徳像

—明治陽明学との比較を中心に—

日露戦争後の日本では、報徳思想によって道徳

的生産者としての理想像が、明治陽明学によって
道德の体现者としての理想像が造り出されたが、
それは、それぞれの祖である尊徳・大原幽学の生
き方の相違に起因すると指摘しています。

張遠帆 北京大学言語文化学部 4年

「性学思想と報徳倫理との比較を試みて」

大原幽学は封建制下の武士の学説から脱却でき



なかったが、
尊徳は当時の
町人の商品経
済倫理から啓
発を受け、農
村にその活力
を注入するこ
とができて、

近世と近代との架け橋となったと評価します。

劉軍 北京日本学センター 博士課程 2年

「二宮尊徳の報徳思想源流

一『大学』と『論語』を中心に」

尊徳の思想体系は、いずれの学派にも属してい
ないが、主として儒教の影響を受けていると指摘
します。しかし、彼の儒教に関する解釈は、全く
独自のものであったことを強調しています。

俞慰慈 福岡国際大学専任講師

「尊徳思想と中国文化

一『三才報徳金毛録』を中心に」

尊徳の思想を象徴する言葉のうち、「三才」は
『易経』から、「報徳」は『論語』『詩経』から、
「金毛」は仏教（臨済宗）の經典『碧巖録』からの
引用だが、それらは単なる借用ではなく、独
自の解釈が加えられているといえます。

以上、1日目の発表が終了したところで、北京
大学日本文化研究所から報徳博物館へ、同大学の
風景が描かれた壺が、同じく大日本報徳社へ、水
晶製の標柱が、それぞれ贈呈されました。

6時30分から、中国側主催の晩餐会が大学内の
食堂で催され
ました。北京
大学日本文化
研究所名誉所
長の孫宗光氏
と、尊徳玄孫
の二宮精三氏
が代表して挨拶
に立ち、出席者全員の友好が深められました。



◆6月23日・シンポジウム2日目

シンポジウムの2日目は、定刻の午前8時30分
から始まり、まず、以下の6名による発表が行わ
れました。

胡連成 福建華僑大学日本語学部専任講師・北京
大学歴史学部博士課程

「二宮尊徳の報徳倫理及びその現代的意義」

日本の近代的・現代的発展に報徳倫理が役立っ
たことは疑いないといえます。そして、その報徳
倫理は地域・国籍・民族を問わず、農村と地方財
政を再建し、貧困と紛争を社会から根絶するため
に、現代でも意義があると強調しました。

宇津木三郎 財大倉精神文化研究所所員・報徳博
物館非常勤職員

「日本近代化発展と報徳思想」

明治以降、地域指導者が報徳思想を熱心に学ん
で率先垂範し、ねばり強く民衆を教諭したが、そ
れが、勤儉力行を尊重する国民性の形成にも影響
したといえます。また、報徳思想は近代の民衆に
農村復興を実現する主人公としての豊かな将来の
可能性の道筋を示したと指摘しました。

龍煒 北京大学日本語文化学部修士課程 2年

「至誠と実行の道

一尊徳の知行論と儒家思想との関わり」

尊徳は、儒
教から大きな
影響を受けて
天道・人道論
などの思想を
形成し、その
思想を至誠を
以て実行して



いったと指摘します。尊徳の思想が、当時の社会
や後世に大きな影響を与えたのも、それが実践さ
れたからであると強調しました。

飯森富夫 報徳博物館学芸員

「二宮尊徳にみる中国思想の受容

一研究の一視点」

尊徳の思想の中に中国思想がどのように受容さ
れているのかを共同研究していく場合の一方法と
して、公刊されている尊徳の言行録の中から、中
国の古典などが引用されている部分を抽出し、そ
れらを比較検討すべきことを提唱しています。

崔嵐 南京国際関係学院専任講師

「現代人が報徳思想から教わるものは何か」

報徳思想は、個人主義や民族対立などの問題解決に役立ち、エネルギー危機や環境汚染などの問題解決にも有効で、さらには、商品経済の進展にともなう道徳心の希薄化といった問題を解決する経済倫理学・経済哲学たり得ると評価します。

金勲 北京大学外国語学院日本語学部副教授

「『報徳』と『報恩』

―二宮尊徳と少太山との実践倫理を中心に―

尊徳の思想と、韓国の円仏教の創始者少太山の倫理思想に、いくつもの共通性があることを紹介し、儒学が東洋の各民族の歴史認識や社会発展に大きく作用したことを指摘します。また、尊徳の天道・人道論は最良の宇宙論と評価しました。

以上で発表は終わり、休憩をはさんで、11時15分から閉会式が、草山館長・金勲氏の司会で行われました。まず、劉金才氏と皇紀夫氏の挨拶があり、劉氏が、



今回のシンポジウムの論文集を日・中両国語で、本年12月までに刊行し、向こう2年の間に、

「二宮尊徳国際学会」を設立しようと呼び掛けました。皇氏は、中国側の発表の内容が予想以上に優れており、かつ中国側出席者の日本語のレベルの高さが実に頼もしいと賞賛しました。

続いて、日本側から、ノンフィクション作家で『江戸の家計簿 家庭人・二宮尊徳』の著者新井恵美子氏・女性史研究家で『二宮文一父尊徳の事業に尽した生涯』の著者柴桂子氏・今市市教育長木村浩氏が、中国側から、張憲生氏・中国中医研究院副教授劉文柱氏が、指名を受けて、2日間にわたったシンポジウムの感想を、それぞれ述べました。

次いで、劉金才氏と草山館長との交流のきっかけを作った下荒地勝治氏が、中国側は北京大学日本文化研究所が中心となっており、研究体制を整えていくであろうが、日本側としてはどうすべきかなど、今後の課題について、いくつかの提案を行いました。

最後に、草山館長が、2回目のシンポジウムを2年後の2004年の夏ごろ、日本で開催したいと希望を述べ、閉会式をしめくりました。

出席者全員が北京大学内の食堂で昼食をとった後、日本側の出席者は、バスで、同大学内をめぐる、そのまま故宮博物院（紫禁城）の見学へと向かいました。

午後6時から、報徳博物館主催の懇親会が北京友誼賓館で催されました。報徳福運社評議員河野秀雄氏の歯切れのよい司会のもと、同理事小笠原清氏が今回のシンポジウム開催に至る経緯などを熱弁し、北京大学日本研究センター副主任賈蕙萱氏らが挨拶を述べた後、静岡県御殿場市の愛郷報徳社長伊倉隆嘉氏が乾杯の音頭をとりました。

2日間におよぶ研究発表と討論が終わり、緊張

も解けたためか、1日目の晩餐会以上に、宴の時間はなごやかに流れて行きました。お互いの住所を教え



合う人。出身地のことを語り合う人。はたまた、討論の続きをする人……。『お開き』を告げる司会者の言葉がなければ、語らいの席は延々と終わることはなかったかもしれません。

当初、「夢物語」とも思われたシンポジウムは予想以上の成果をあげる結果となりました。もちろん、克服しなければならない問題は多々あります。たとえば、研究の基本となる資料が、中国側には十分に揃っていないことなどです。今後、問題の克服のために、友の会会員の皆様に、さまざまな形でご協力を仰ぐ場合もあるでしょう。その際は、どうぞよろしくお願いいたします。

◆シンポジウム報告写真展

今回のシンポジウムの概要を写真と関連資料でお伝えする「二宮尊徳思想国際シンポジウム（於



北京大学）報告写真展」が報徳博物館企画展示室で7月14日（日）から9月30日（月）まで開催中です。発表者の顔触れ、発表の要旨、懇親会の様子、北京の風景、記念品などをご覧ください。

武蔵野に尊徳の跡を訪ねて

かなり時間が経ってしまいましたが、去る5月12日（日）に行われた第13回友の会遺跡めぐりについて、報告します。

今回は、嘉永3年（1850）5月22日、尊徳が真岡代官山内総左衛門らと、武蔵野をめぐった際の行程を主としてたどった旅でした。

◆出発

午前9時30分、32名の参加者を乗せたバスは新宿駅西口の朝日生命ビル前を出発しました。青梅街道を西へ進み、地下鉄丸ノ内線「新中野」駅の手前の「鍋屋横丁」で、西南にのびる道に入ります。この道は、日蓮宗妙法寺（杉並区堀ノ内）への参詣道として、当時の江戸に住む人々には有名で、落語「堀ノ内」（別名「あわてもの」）の中にも登場します。

江戸での滞在先である西久保（港区虎ノ門5丁目）の宇津邸を早朝に出発し、小川町（千代田区神田小川町）で山内と落ち合って、妙法寺へ向かった尊徳も、この「鍋屋横丁」を通過したに相違ありません。

◆妙法寺

妙法寺には、日蓮42歳の厄年に開眼供養したという日蓮の木造が安置されていて、江戸時代から「やくよけ祖師」として人々の信仰を集めていました。前述の落語でも、「堀の内のお祖師さま」と呼ばれており、広く親しまれていた様子がうかがえます。尊徳も日記に妙法寺ではなく、「堀内日蓮」と記しています。



同寺の山門は天明7年（1787）に再建されたものです。尊徳は、この門が自分と「同い年」だということを知っていたのでしょうか。山門から南へのびる細い道は鎌倉街道とも呼ばれる古道で、尊徳の次の訪問地である大宮八幡宮へと通じています。バスはこの道を通れませんので、参加者は山門の前に立って、しばし、古道を行く尊徳たちの後ろ姿を想像したのでした。

なお、尊徳らの同寺参詣は、日蓮宗に帰依する山内の意向によるものであったかもしれません。

◆大宮八幡宮

妙法寺から1.5kmほど南西に位置する大宮八幡宮（杉並区大宮）は、東京23区内の神社で3番目に広



い境内地をもち、「多摩の大宮」と称されます。また、秩父の大宮（秩父神社）・足立の大宮（大宮氷川神

社）とともに、「武蔵国の三大宮」とも呼ばれます。大鳥居の前から東へと延びる参道には、八幡太郎義家が奥州へ進軍した時に鞍を掛けたといわれる松などがあります。尊徳も通ったであろうこの参道を参加者も歩きました。

社頭で、同宮の職員の方に出迎えを受け、境内の一室に通された参加者は、森下理禰宜から、同宮について説明を伺いました。

◆井之頭弁財天

大宮八幡宮を後にして、バスは西に約6km離れた井之頭公園へ向かいました。尊徳が訪れた井之頭弁財天は、同公園の東半部の大部分を占める井の頭池の西南端に位置します。

参加者はまず、弁財天堂の南側の崖上にある人面蛇体の宇賀神の石像を見学しました。弁財天は古代インドの河神サラスパティーのはたらきを神格化したものですが、その使いである蛇は、古代の日本人に水神として仰がれました。そのため、弁財天は日本古来の水神と混合し、人面蛇体の宇賀神として表されたのです。すなわち、これは神儒仏が一体となった姿といえます。この宇賀神像は明和4年（1767）の作ですので、尊徳も目にしたことでしょう。自分の思想を「神儒仏正味一粒丸」と称した尊徳は、石像をどんな思いで見つめたのでしょうか。



崖に取り付けられた急な階段を降りて、小さな石橋を渡ると弁財天堂があります。ここは井の頭池に浮かぶ小さな島で、東方に広い水面が見渡せます。井の頭池の東端から流れ出す神田上水（神

田川)は、江戸城内や城下の飲料水とするため、徳川家康によって開削されたといわれます。尊徳たちが井之頭弁財天に詣でた真の目的は、江戸の町の水源を視察することにあつたのではないのでしょうか。とすれば、大宮八幡宮から井之頭弁財天までは、神田上水沿いを検分しながら歩いたものと思われます。ただし、バスでは、その道をたどることは不可能ですので、上水とほぼ平行する井ノ頭通りを西走しました。

◆昼食

尊徳たちが、当日どこで昼食をとったのかは不明ですが、友の会の面々の昼食会場は、池の北側、吉祥寺駅に至る道路沿いにある「利休」という和食の店でした。適度なアルコールもいただきながら、品の良い会席料理を目と舌で堪能しました。

◆世田谷代官屋敷

昼食後のバスの行き先は、井之頭公園から南東へ約9kmの距離にある世田谷代官屋敷です。午後の遺跡めぐりは、尊徳らが歩いたコースからははずれます。

世田谷代官屋敷は、彦根藩主井伊家の所領のうちの世田谷領15か村の代官である大場氏の屋敷跡です。現存する表門と母屋は、国の重要文化財に指定されています。表門の前を東西に通る旧大田街道(矢倉沢子選)で、毎年12月15・16日と1月15・16日に開かれる「世田谷のボロ市」は有名です。このボロ市は、小田原北条氏時代の楽市の名残りであるともいわれています。

代官屋敷の敷地内には、世田谷区立郷土資料館があります。東京都の有形古文書類に指定されている1400点近い大場家文書を保管し、世田谷の通史などを常設展示しています。代官屋敷とともに、無料で見学できます。



◆教学院

世田谷代官屋敷の東方2km足らずに位置する天台宗教学院最勝寺が、この日最後の見学地です。同寺に安置されている不動明王像は「江戸五色不動」のひとつで、目青不動と呼ばれています。五色不動とは、目青不動のほか、目黒(目黒区瀧泉寺)・目赤(文京区南谷寺)・目黄(台東区永久寺)・江戸川区最勝寺)・目白(豊島区金乗院)の各不動をいいます。

境内には、小田原藩・烏山藩(栃木県那須郡)・荻野山中藩(神奈川県厚木市)の各大久保家歴代の墓域があります。小田原藩主で、尊徳のよき理解者であった大久保忠真の墓に参加者は花をたむけ、かわるがわる手を合わせました。



境内にはほかに、袂姿で端座する尊徳の肖像画



の作者で、一般的には花鳥図の得意な画家として有名な小田原藩士の岡本秋暉をはじめ、秋暉の長男で、皇居前広場の楠木正成像の碑文を書いた書家岡本碧巖などの墓もあります。

教学院は現在、東急新玉川線・東急世田谷線の「三軒茶屋」駅から徒歩

5分、世田谷区太子堂4丁目に所在しますが、もともとは江戸城内の紅葉山に創建されました。その後、赤坂・青山を経て、明治42年(1909)から3か年を要して、現在地に移転しました。

尊徳は、青山に所在したころの教学院に何度も足を運び、大久保忠真の仏前に額突いています。とくに、嘉永2年(1849)10月29日には、亡き主君のために金300両の永代供養料を納めました。

尊徳が参詣した教学院の旧地は、現在の港区南青山2丁目の外苑前郵便局のあたりで、地下鉄銀座線「外苑前」駅の至近です。

午後6時前、バスは出発地と同じ新宿駅西口に到着し、遺跡めぐりは終了しました。

◆尊徳の「武蔵野めぐり」の目的

井之頭弁財天を發った尊徳たちは、高井戸ー荻久保ー四谷ー西久保という経路をたどります。

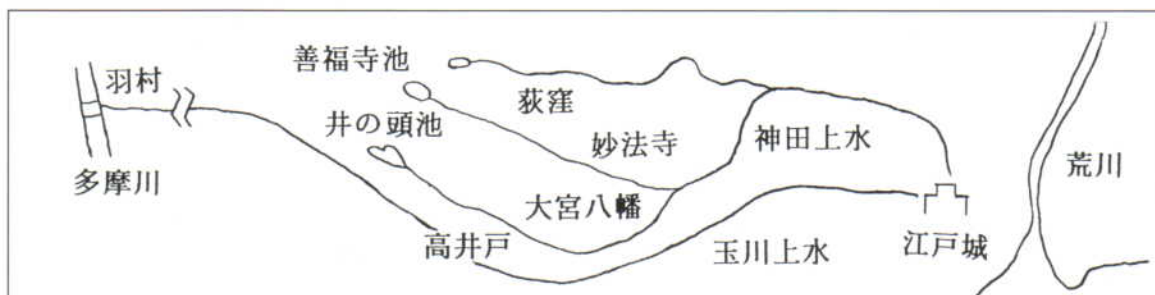
高井戸とは甲州街道の高井戸宿のことと思われます。同宿は合宿で、月の前半は下高井戸宿が、後半は上高井戸宿が宿駅として機能します。ですから、尊徳たちが通ったのは上高井戸宿（杉並区上高井戸）の方であったでしょう。

ところで、高井戸の次は「荻久保」へ回っています。これが現在のＪＲ中央線沿いの杉並区荻窪であるとするれば、高井戸からは3kmほど北上することとなります。つまり、井之頭弁財天からは一旦、南東方向へ、かなり迂回した道筋を通っているのです。わざわざ、高井戸を経由した理由を尊徳は記録していませんが、神田上水の南側を平行するような形で流れる玉川上水を検分するためであったとも推測できます。玉川上水は、多摩川の

きます。善福寺川は、同宮から約6km西北にある善福寺池（杉並区善福寺）に源を發し、同宮の東方約2kmの地点で、神田上水に注いでいます。

そもそも、この年の3月末、東郷陣屋（栃木県真岡市）にいた尊徳は、急速、江戸へ呼び出されました。江戸到着直後から、6月はじめに東郷へ帰るまでの約2か月の間、各方面の関係者と、報徳仕法のことについて相談をするなど、尊徳は精力的に活動をしています。そうした中であって、5月18日、御材木奉行の山岡伊織が会いたがっていることを山内から聞いた尊徳は、同月22日、山内とともに、武蔵野を歩いたのでした。

幕府の命令によって尊徳は、弘化3年（1846）幕府直轄領である日光神領復興のための仕法雛形を完成させます。ところが、幕府は仕法に着手せよという命令をなかなか出しません。数年間、尊徳は飼い殺しの境遇にあったわけですが、「武蔵野



水を羽村（羽村市）で堰き上げ、武蔵野の大地の上を延々40km以上にわたって通して、江戸に住む人々に飲料水などを供給した用水路です。

「荻久保」で尊徳たちは、青山御材木奉行山岡伊織と面会します。すでに夜になっていましたので、一行は提灯をもって、山岡がとくに念入りに育てている「植木」を検分しました。無論、この「植木」は盆栽などの観賞用のものではなく、土木工事の用材などとしての樹木です。なお、山岡は幕府の直轄林の管理などを役目とする御林奉行も兼ねていました。

実は、これより4日前の5月18日、尊徳は山内から、御材木奉行の山岡が会いたがっているので近日中に「植木見物」かたがた出かけようと言われていたのです。この日は、そのための「武蔵野めぐり」だったのであり、寺社詣でが主な目的ではなかったわけです。

とすれば、大宮八幡宮の参拝の際も、同宮のすぐ北側を流れる善福寺川を検分した可能性が出て

めぐり」の前年の嘉永2年（1849）には、日光神領とは別の幕府領で尊徳が実施していた仕法を幕府が追認するなど、徐々に前途は開きはじめていたのです。そして嘉永6年（1853）、日光神領の復興仕法着手が認められました。

こうした流れを念頭に置いた上で、尊徳の「武蔵野めぐり」をさまざまな角度から考えてみる必要もあるでしょう。ほぼ半世紀の後、国木田独步は武蔵野の雑木林の中で「自由」を感じ取りました。上水道やその水源、さらには土木用材の検分など、復興仕法に関わる即物的な旅ではありませんでしたが、尊徳は名にし負う武蔵野で何を感じ、考えたのでしょうか。興味の尽きない問題です。

発行 財団法人報徳福運社

報徳博物館友の会

〒250-0013 小田原市南町1-5-72

電話0465(23)1151・振替00250-6-24450